

法隆寺の金堂壁画とならぶ古代の彩色仏教壁画が見つかったことで有名な上淀麿寺ですが、境内の中塔の南北に二塔を配し、三塔が南北に並ぶ特異な伽藍配置であったことは、他に類例を見ないそうです。

東西二塔が並ぶ薬師寺が、日本で双塔伽藍が展開していく始まりだそうです。持統天皇が病に倒れた時に、天武天皇が病氣平癒を祈願して、680年に建立を発願しています。各層に裳階(もこし)と言われる小さい屋根があるため、六重に見えますが三重塔で、なかでも東塔は創建当時から1300年の時を経て現存している建物で、国宝に指定されています。

上淀麿寺は「癸未(天武12/683年)」と書かれた瓦が出土していることから、薬師寺とほぼ同時期の創建とされます。しかし、両者の関係は薄そうで、花谷先生は、神宮寺の出現との関係を検討されているようです。神宮寺とは、神社に付属して建てられた仏教寺院を言います。日本固有の神道と、外来である仏教との調和、融合のために唱えられた教説が神仏習合であり、神宮寺はその結果生まれたと考えられています。奈良時代から、鹿島、多度、二荒山、熱田、賀茂、宇佐八幡、伊勢大神宮などに神宮寺が建てられ、神仏習合思想の進展、さらには本地垂迹説の成立に伴い、9世紀以降になると気多、石清水、石上などの神社に相次いで神宮寺が現れ、やがて諸国の神社に神宮寺が設定されるにいたっています。

右の“氣比宮古図”は、室町末期と伝わる古絵図ですが、確かに幾つもの塔と神宮寺が描かれています。「藤氏家伝」によると霊亀元年(715)に建立したことになっていますが、講座では神宮寺の始まりは宇佐八幡とのことでした。「続日本紀」天平13(741)年の記事にある宇佐八幡が始まりとの見解が一般的のようです。

宇佐八幡と言えば神護景雲3(769)年に“道鏡を天位に”と言う神託事件が有名ですが、それより先の天平勝宝元(749)年に、大仏開眼を3年後に控えて八幡神の東大寺参詣が執り行われています。『続日本紀』によると“八幡大神の禰宜尼大神朝臣社女は、天皇と同じ紫色の輿に乗り、東大寺を礼拝して「神である私が日本の天神・地祇を率い誘いて必ず成し遂げましょ

う。・・・と神がおっしゃって完成した”とあります。神(八幡神)が 仏(盧舎那仏)を造って、それを敬ったわけですから神仏習合と言わざるを得ません。それを中央政界が大々的に広報したと言えるでしょう。

神託事件は、権力を専横し始めた藤原氏に対して、それを見かねた称徳天皇が図った中央政権内の試みとの見方もできますが、中央から遠い八幡社側が、先代の聖武天皇の時から入念且つ組織的に中央政界に近づいて実現したのが八幡神の東大寺参詣であり、神託事件の伏線だったとの見方もできるのではないのでしょうか。

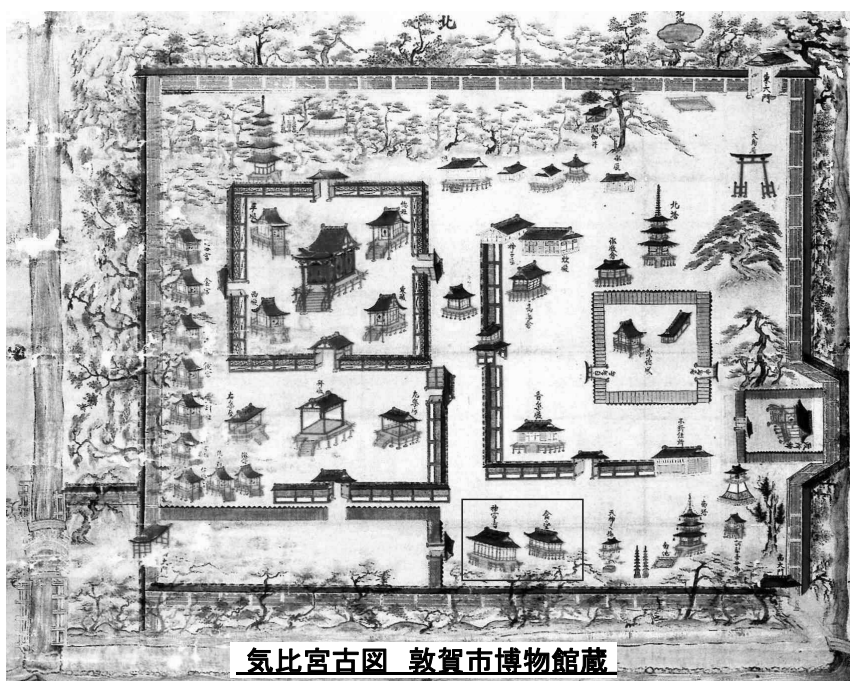
藤原仲麻呂に紫微中台の弼(次官)として担ぎ出された石川年足が、ひと月後には当局(天皇)側の公式の使い(迎神使)として八幡神に対応しています。年足が自ら働きかけたのか、それとも藤原氏側と天皇側の双方の陣営から翻弄されたのかわかりませんが、激動の律令国家成立のキーマンとして東奔西走しています。

昨年10月の講座では、その年足が上淀麿寺や教皇寺の造瓦技術や造寺を介して、伯耆とつながっていた節があることを聴講しました。律令国家成立の陰に、上淀麿寺の三塔伽藍配置の謎を解くヒントが潜んでいるかもしれません。

※ 古代史(弥生時代～飛鳥時代)に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論 大募集 (体裁は自由ですが、文書でお願いします)



薬師寺 パンフレットより



氣比宮古図 敦賀市博物館蔵